

## 岩槻

このフォーラムは、今年度は3回計画されております。今日は第1回ですから、自由に話を展開させていただきたいと思っています。

### 自然と人間との共生

フォーラムは、国際花と緑の博覧会記念協会が主催されています。90年の花博のときに「自然と人間との共生」という言葉が標語として使われました。最近では、例えば政府や地方公共団体から出しますさまざまな文章にも「人と自然の共生」あるいは、それに類した言葉が頻繁にでてきます。ところが、人と自然というのは、もともと自然(natural)という言葉の反語は、人為・人工(artificial)ですから、相反する二つの言葉の間に共生があり得るのか、という非常に皮肉な言い方をされた方もおられるように、「人と自然の共生」というのは、テーマとしては非常に難しいテーマです。

### コスモス国際賞の理念

そういうテーマを主題にした花博記念協会の活動の、重点を置いている事業の一つに『コスモス国際賞』という大きい国際賞があります。つい先日、第11回目の授賞式があって、受賞記念の講演会も大阪と東京でありました。そこでも花博の理念、『コスモス国際賞』の理念というものの議論がありました。今年、受賞されたのは、アメリカのミズーリ植物園のピーター・レーブン博士です。彼は、創設のときから第10回目まで、コスモス賞委員もやっていただいていた、『コスモス国際賞』自身に大きい貢献をしていただいた方ですが、そのピーター・レーブン博士が大阪と東京の講演会が終わって、いろいろ議論した最後に、「私は創設のときからコスモス国際賞にコミットしていて、“人と自然の共生に向けて”というテーマを非常に重要だと思っているけれども、そこで本当に何ができるのかというのが、まだ自分でははっきりと腑に落ちたわけではない」という言い方をしていました。今、並んでいただいているお二人、村上先生と小山先生は、『コスモス国際賞』の選考委員でもあります。『コスモス国際賞』について一番よくわかっていただいている方なので、これからお話を伺いながら、それがどういうふうに説明されるのかを、皆さんと一緒に考えさせていただきたいと思います。

### 総合的な視点

『コスモス国際賞』は人と自然の共生に貢献した人を顕彰するものですが、キーワードとしては、貢献された業績が地球的規模のものであるということ、もう一つは、統合的な視点に基づいた研究であることということです。20世紀の科学は、解析的・還元的に進められた成果が科学技術に結びついて、飛躍的な進歩があって、それで我々は、物質的に豊かになったという言い方がされますが、豊かになった我々が21世紀へ持ち越した課題が、環境問題と南北問題であるということも、今では常識になっていることです。そういう問題を解決していくためには、解析的・分析的な研究をただ単に積み上げるだけではなく、

統合的な視点で物事を見るという対応が必要ではないと言われるようになりました。日本学術会議でも、そういうのを文理融合とか、俯瞰的な見方とかというような言い方で表現しています。92年のリオデジャネイロの環境サミット、「リオ10」と言われました昨年度のヨハネスブルグサミットでは、サステナビリティ（持続性、地球の持続性）ということが強く訴えられました。最近では、それが、「サステナビリティ・サイエンス」という、日本語では「持続科学」とか「持続性の科学」とでも言うんでしょうか、そういうものをつくり上げる必要があるということが、あちこちで議論されているのが実際です。その意味では『コスモス国際賞』は、すでに11年前の発足当初からそのことを訴えようとしてきました。これまでの顕彰の成果を見て、本当に人と自然の共生に資することがどこまでできているのか、あるいは、統合的な視点による科学の推進にどういう役割を果たしてきたのかということもふまえながら、そういう非常に重いテーマがこれからどういうふうに生かされるのかを、このコスモスフォーラムを通じて検討していきたいということです。

これまで、花博記念協会が主催された2回の『賢人会議』では、地球規模で科学者が連携する組織として、アカデミア・コスモサーナという機構をつくらうじゃないかという提唱も行われています。そういうところでイメージする“統合的な視点で見る科学”とはいったい何かを論じたいということが、このフォーラムの趣旨です。

非常に重いテーマですから、多少、話が抽象的になる部分もあるかもしれませんが、難しい言葉遣いが出てくることもあるかもしれませんが、今日のフォーラムを活発に進めるためには、あらかじめシナリオを作ってシナリオ通りに動くということはやりません。3人の先生方には、こういうテーマを基に初めに15分ずつほどお話をいただいて、お話に基づいてお互いに話し合っただこうという企画にしております。まず養老先生から、今のようなことについて最初のお話をお伺いいたします。

## 養老

### 意識が人工、無意識が自然

まず、最初に申し上げたいのは、これまでのお話の中で「人間と自然の共生」という言葉が出てまいりましたが私はその言葉は使わないんです。私流の定義を申し上げますと、“意識”ということが人工であって、“無意識”に当たるものが自然と考えております。

なぜそうなったかと言いますと、私は解剖学を長年やっておりまして、死んだ方を扱っております。死んだ人が何だといったら、これは自然と呼ぶしかないんです。生きている人との一番大きな違いは、そこには意識が全くないということです。別の言い方をしますと、我々は身体（しんたい）という自然をかかえているのでありまして、「人と自然との共生」というのは、実は、意識と体の共生、つまり、心と体という問題であろうと思っています。人間の社会の中だけでいえば、先ほど、岩槻先生は南北問題とおっしゃいましたが、要するに、都会と田舎の関係と言ってもいい。そして、もっとさらに外まで持ってい

けば、熱帯雨林対都市という、いわゆる自然対人間社会あるいは人間というとらえ方にもなる。だけれども、解剖をやっておりまして、身体そのものの実在性を非常に強く感じます。それを人間の中から当然取り去ることはできないわけで、その意味でも、人間対自然という図式よりは、意識対無意識というか、心対体と言ったほうがわかりいいのではないかと、そう思っています。

### 解剖学はいらない？

その次に、統合的理解という言葉が出てきました。統合的理解というのも非常に難しく、私が解剖をやっておりまして一番困ったのは、解剖学を学生に説明することです。解剖学を学生に説明するときに、「これは本当に学問だろうか」という疑いがいつもあるわけです。私自身が解剖学をやっていて悩んだのは、もし学問というもの genuinely 経験的・実証的であるならば、解剖学はいらないんですね。実証ないし経験そのものが重要であるなら、解剖学は不要だという考え、人間の体の問題を、本当に具体的に扱いたかったら、その都度、人体を持ってきて解剖すればいいんです。人間の体そのものをそこに持ち出せば、まさに経験であり、実証でありますから、それ以上学は要らないじゃないかということ、実は、解剖学をやりながら考えておりました。それで、ずっと解剖をやっておりまして、最近、いろいろなことを言いますが、基本的にそれはそういった解剖から考えたことでもあります。意識の問題も典型的にそうで、なぜならば、さっき申し上げましたように、亡くなった人は生きてるときとそっくりですが、一番はっきりしているのは意識が無いんです。しかしそれは、非常にはっきりと私には人間に見えます。今度は、その体というものを統合的に理解する。つまり、私は、体は自然だと申し上げましたから、それを統合的に理解するというのはどういうことだろうと考えます。さらに、それは人間というものから意識が抜けてしまっていますから、そういった自然としての人間を把握するのはまさに解剖学だと思うんですが、これが統合的かということ、実はとんでもなくて、どんどんどんどん細くなって、どんどんどんどん統合から離れていっている気がします。そして、どこに問題があるかということ、これも、人間と自然の対立という言葉が問題だったように、統合的な理解ということに、私はまた問題があるような気がします。

### 情報とシステム

岩槻先生は、先ほど、分析的・還元的な理解とおっしゃった。分析的・還元的理解というのは、私の言葉で言い換えますと、「情報化」ということに尽きます。情報に変えると。つまり、生物を徹底的に情報化していきますと、最後に遺伝情報に変わります。DNAの塩基配列に変わってしまいます。生物学の世界にドーキンスの『利己的遺伝子』がありまして、皆さん方は、遺伝子が進化の過程で利用している乗り物 (Vehicle) であるという表現があります。なぜかということ、進化の過程ですっと生き残ってきたのは遺伝子ですから、比喻として言えば、皆さん方は、長い時間遺伝子が生き残っていくための、その時そ

の時その時の乗り物であるという見方になってきます。

ところが、そこでものの見事にドーキンスが忘れていることが一つあります。彼は、進化の過程ですべての遺伝子が生き残ったと考えるわけですが、忘れているのは、19世紀に、ウイルヒョウという病理学者が一言言ったこと、「すべての細胞は細胞から」ということです。どういう意味かということ、皆さんの細胞は全部親の細胞です。その親の細胞には、また親の細胞があって、それにはまた親のと、ずっとさかのぼっていきますと、細胞は遺伝子と同じように一度も滅びたことがないということがわかります。すなわち、進化の過程で滅びなかったのは遺伝子だけではなく、実は、細胞が滅びていません。この細胞に代表するものを、私は「システム」と呼んでおります。細胞に代表されるような複雑な要素が上手に動いて、いつも似たような形をして何かやっている。つまり、生きていているものを、私は一応「システム」と呼ぶ。

それに対して、遺伝子を何と呼ぶかということ「情報」と呼びます。そうすると、近代科学というものは、徹底的に生き物というシステムを情報に変えてきた仕事です。それは医学をご覧になればよく分かります。皆さん方が病院にお出かけになれば、お医者さんがすることは、皆さん方の体を検査することです。順繰りの検査を全部終わらせて、医者のところに戻ってきますと、「検査の結果が1週間たったら出るから、また来てください」と。以上、終わりでございます。検査の結果とは、本日の皆さんの体に関する情報、あるいは情報を生み出すためのデータです。それを近代科学、近代的な医学と言っています。皆さん方がそういう検査をやっている過程で面倒をみってくれるのは、看護婦さんです。私は、自然の統合的理解というふうに言うときにすぐ感じるのは、医者と看護婦の違いです。医者は検査の結果を見て情報を分析して判断する人ですが、皆さん方そのものを見る人は、近代の病院でいえば看護婦さん。最近では、その看護婦さんが勉強をするようになって、論文を書くようになりましたから、基本的に皆さん方の面倒をみってくれるのは付き添いさんだろうと、私は思っております。

もう一つ申し上げたいのは、現代の研究者、偉い先生方は、全員が論文を書く人であるということです。医者にせよ、生物学者にせよ、実際に扱っているものは生き物ですが、それを必ず論文にするんです。では論文を生きているのかということ、どこも生きておりません。論文を100万集めても細胞1個できないし、植物1本、それこそ雑草1本できません。私が一番申し上げたいのは、そのことです。ここ150年間、19世紀半ば以降の科学は、今、私が申し上げたシステムをすべて情報に書き換えるという作業をしてきた。そういう世界を作ってきたということです。

#### 岩槻

どうもありがとうございます。

大変示唆に富んだお話でした。あとお二人の先生のお話を伺ってから議論に入らせてい

ただきたいと思います。

村上先生、次、お願いします。

村上

### 倫理の視点から

私の今日のポイントは、一点に絞ります。それは、倫理という問題です。

もともと倫理的配慮というのは、自分たちのコミュニティー、あるいは近隣のコミュニティーの関係ぐらいのところが開の山であったんだらうと想像できます。だから、いわば仲間に対する責任と行動の責任といったような問題が、倫理の規範あるいは基礎にあったと考えれば、それが近代に向かって少しずつ開かれていく、その対象が広がっていくという傾向が見られるように思います。

例えば、キリスト教が支配するようになったヨーロッパは、「人間」という非常に抽象的で普遍的な概念を、他の世界から区別するという、人間だけをほかの自然から切り離すということ、ほかの文化圏よりもかなりはっきりとやって、その結果として、人類普遍という抽象的な概念は、とりあえずは自分たちのものにしたと思われます。けれども、倫理という点で考えれば、なかなかそれが人類普遍の倫理に広がらなかった。例えば、1549年にサビエルたちが日本にやって来ます。そこで、日本の状況に関して、さまざまな観察したデータをローマに書き送るという仕事をする人たちがいまして、その人たちが日本について、「キリスト教が支配していない社会で、これほど高潔な道徳倫理観が行き渡っている社会に出会ったのは、極めて大きな驚きである」ということを言っているわけです。それは、キリスト教の世界の中にしか、いわば倫理はないと彼らが思いこんでいた、という非常に明確な証拠になりました。これは何も16世紀だけではなくて、20世紀でさえそうです。新渡戸稲造が『武士道』という本を英語で書きますが、新渡戸は、「日本では宗教的な背景がないのに、倫理がまかり通っている。とにかく倫理観があるというのは一体あり得るのか」という問に対して、自分で答えを出そうと思ってこの本を書いたのです。キリスト的世界観の中にそういう発想が、まず、ある。つまり、自分たちの世界の中にしか、基本的に倫理は存在しないという思い込みがあった。しかし、キリスト教国であるアメリカでは、例えば、黒人の基本的な権利が差別されていたのはご承知の通りで、人類普遍という抽象的な概念を持っていたとしても、それが本当の意味で、人類普遍の倫理というところまで広がっていくという契機は、まだ20世紀までは存在しなかったと思われる。

### 時間的な倫理・空間的な倫理

ところが、20世紀に入って事態は二つの意味で変わってきたと思うんです。一つは、時間的な倫理の拡大。もう一つは、空間的な倫理の拡大です。まず、時間的なほうから申し上げますと、公害問題というのは、今、公害で悩んだり亡くなったりする人たちが現実

にいる問題であるわけです。それに対して、一般的に言われている環境問題は、今、私たちがやっていることが、数世代後の、つまり時間的にははるかに先の世代に対して、影響を与えうかということが、倫理上の問題、責任として問われるという事態が起こっているということです。その分野の人たちは「世代間倫理」という言葉でそれを呼ぶようですが、将来、この地球に生きるであろう人々に対する、現在の私たちの行動の責任をどう取るかということが倫理上の非常に大きな問題の一つとして浮かび上がってきた。それを知らしめたのが環境問題だということができると思います。

同じような観点で考えますと、先ほどの養老先生の話の中でも、死者ということが出ましたが、人間は、過去になってしまった人でも、葬礼という形である種の倫理的な扱いをするというふうになってきているわけです。つまり、人間は過去に対してはある程度の倫理的配慮をしてきました。ところが、今言ったように、将来に対して倫理的配慮をするということを、別の例で申し上げますと、脳死者をどう扱うかという問題も似たような問題ですね。死者のうちに入れるのか、入れないのか。呼吸もしていて、体温があるような“脳死体”から、臓器を取り出していいのかどうかという問題も、言ってみれば、生が過去になりつつある人に対する倫理的判断ということができるわけです。また、精子とか卵子とか、あるいは胚、受精卵、胎児といったようなものに対して、私たちはどういう倫理的判断を施すかということも、やや未来系の倫理ということができると思います。つまり、時間的に、現在私たちが、今一緒に生きている人たちだけでは、倫理的判断が足りない、不足するという、そういう総合的な、いわば時間的に過去から未来に向かって、配慮しなければならない状況が、一つ生まれてきていると言えるのではないかと思います。

それに対して、もう一つ、空間的に倫理的対象を広げなければならないという事態が起こっている。それは何かと言いますと、現代では欧米系の場合に、実験動物に対する配慮というようなことが、生物学の実験の中に付け加えられてきております。実験動物を人道的に扱うということはどういうことであるのか。あるいは、クジラ、イルカ問題というような非常に現実の、私たちの今の事態に関わりのあるものから、さらに生態系維持というようなときに、ここでは態度が二つに分かれるわけです。一つは、人類の利益を考えた上で、生態系の保存が必要になる。従って、生態系の保存ということは、人間が自然を搾取し続けるのはいけないのであって、自然が人間にとって利益がある形で持続(sustain)されなければならない。そのサステナビリティを実現するために、私たちは、他の種に対する倫理的配慮というものを考えなければならないのではないのかという言い方です。もう一つは、他の種そのものが、それ自体として生存の価値があるというものです。炭疽(たんそ)菌は生存の価値があるのか、HIVのウィルスは生存の価値はあるのか、と問い出しますと、非常に厄介な問題になるわけですが、それぞれ自然の中に存在している種それぞれ自体として生存の価値があるということに対する倫理的配慮を、人間はしなければならない

いのではないかという問題意識が、現在、広がりつつある。従って、地球という一つの大きなシステム全体についても、人間はそれなりの配慮をしなければならない。それも、倫理的な配慮を施さなければならない。そういう議論が、ここ20年、30年程、これも欧米から出てきたものだというふうに考えられますけれども、かなり顕著に現れているということを少し指摘しておきたいと思います。

### 人間とブタ

では、東洋的なアニミズムはそういう問題にどういうふうに絡むんだらうか。その問題に少し触れさせていただけます。これは日本で、生命倫理の分野で活躍しておられるダリル・メイサーさんという方がおられますが、この方のデータに基づいての話です。『ニュー・サイエンティスト』という雑誌が、遺伝子変換をして、ブタに人間の心臓を作らせる実験を繰り返してきた報告があって、それに対して、各国の若い人たちがどういう反応を示したかということをやメイサーさんがデータをとっておられるんですけども、これはなかなか面白い。そもそもブタに人間の心臓を作らせるということは、何を意味しているかということ、臓器移植の時にそれを使う。脳死を待って他人の心臓をあてにするよりはましだろうということで、ブタに人間の心臓を作らせて、必要とするレシピエントが使うということに対してなんですが、ヨーロッパ系のニュージーランド、スペイン、ドイツ、フィンランド、イギリスと比べますと、ブタに積極的に配慮すべきだと答えた人が最も少ないのは日本。人間が大事であるから、ブタを使ってもいいから、人間が大事だ。人間に最も積極的にプラスの答えをした人が、6カ国の中では、日本が最も多いわけです。イギリスですと、ブタにかなり強い配慮をすべきだというのが30%近くあるわけですが、日本ではその半分以下です。一方、人間にそんなに強い配慮をすべきでないというのが、イギリスでは40%を占めるわけですが、日本では22%で、これまた半分ということになります。つまり、山川草木悉皆成仏というような思想を持っているはずの日本で、最も人間が一番大事だという答えが若い人たちにシェアされていて、動物は人間にとってはどうでもよしいという感覚が広がっているというデータを私たちは目の前にしているということをつけ加えて、私の最初の問題提起にさせていただきます。

### 岩槻

どうもありがとうございました。

最初のキーワードを“倫理”という概念の中で、非常にきちりと整理をしてお話をさせていただきました。

引き続き、小山先生に最初のお話をお願いしたいと思います。

### 小山

#### 先住民の言い分

私は考古学と人類学をやってきました。だからオーストラリア・アボリジニやカナダの

ハイダのおじさんやおばさんたちといつも話し合っています。そういう人たちは、物事を常に生活に即して考えている、つまり村上さんが指摘したように、“私に配慮”する人たちなのです。

最近日本でも、自然を守ろうという動きが強くなってきました。それはヨーロッパやアメリカと軌を一にしています。いわゆる先進国ですね。特に厳しいのは、イギリスだとかドイツです。ところが行ってみますと、彼らは徹底的に自然を荒らした後で、「あー、これはしまった、なんとかしなければ」と考えたのではないかという気がいたします。イギリスでは、山には木が全くなくて草地になっていて、逆に街に木がたくさんあるという、ふつうとは全く逆の景観をみます。

先住民の人たちに言い分を聞いてみましょう。いま、私たちは「熱帯林を切るな」という。彼らは「じゃ、おれたちをどうしてくれるんだ」と。「おまえたちは、車に乗って、いい家に住んで、うまいものを食って、楽しんでいるのに、おれらはまだこんな生活だ。車も欲しい」、「森はまだたくさんある。これを売ったら、いろいろなことができる。私たちはずっとここを守ってきた。祖先の遺産の一部を使ってるだけだ」というのです。それに対して、「いや、自然は大事だから、手をつけなくてくれ」というのは、少しムシがよすぎるような気がするのです。

#### 自然を壊すもの

このシンポジウムのテーマは「人と自然の共存」です。そこでまず自然を壊すものについてというものがあるかを考えてみましょう。2万年という時間をとってみましょう。自然を一番大きく変える原因の一つは、気候変化です。2万年前には日本は氷河時代でした。すると一面の氷の世界から、現在の森に変わっていったという時間的な流れのなかで、自然は刻々と変わってきたはずで

つぎに災害があります。大風、地滑り（白神山地はすごい地滑りがいつもあって、人間が荒らさなくても、森を攪乱しています）、洪水（これは六甲山など、人間が木を切り過ぎて起こることもあります）と、それから火山（6千年前頃、縄文時代の前期に、九州の姶良火山の大爆発のため、西日本の植生がほぼやられたと考えられています）

そして動物。シカでもイノシシでも、ネズミでも、その大発生（イノシシ、シカあたりは山村では大変な問題で、今やもう、守るんじゃなくてどうやってコントロールするかというところまで来ていると言われてい

ます）動物のなかで一番悪いのが人間です。しかし、人間がいなくて、自然自体を考えたり、守ったりするのにどんな意味があるのでしょうか。森というものを中心に考えると、私たちは自然にできあがった極相（クライマックス）が一番いいと考えがちです。しかし、カナダでの経験ですが、そんな森はコケがはびこり、びっしりクモの巣がはり、下はジュークジューク。彼らは「ここにはクマやシカでも入らないんだ」と言います。そういう森がず

と広がっていても、どうにも仕方がない。自然のままでは使えないのです。

### 山火事の諸問題

ところで今、テレビでカリフォルニアの山火事が報道されています。森と火の問題は、20年ほど前オーストラリアに行ったとき、アボリジニが林の中でどンドン火を付けていくので驚き、興味を持つようになりました。北海岸部のアーネムランドでは、乾期(7月から10月まで)になると、巨大な煙が方々から立って、もう空は鈍い紫色。私たちは「木1本、首一つ」という伝統があって、森に火をつけるなんてとんでもない、と信じています。オーストラリアの白人たちもそう思っていたらしいんです、彼らも森林地帯から来たのですから。だから植民地政府は火をつけることを禁止した。そうしたら、今でもしばしばシドニーやメルボルンなどの都市近郊で大火災が起こる。ユーカリの林は落ち葉がたっぷり油を含んでいるので、長くとめると発火したとき、ドーンと燃え上がって手のつけようがなくなるんです。これに対しアボリジニは、毎年少しずつ火をつけ、大火事となるのを防いでいたのです。そこには何万年という彼らの生活の知恵が潜んでいたことがわかったのです。

カリフォルニアの場合は、オーストラリアと比べると100年以上、文化が失われるのが早かったために、もし森に火をつける習慣があったとしてもわからなくなったんだと思うのです。彼らも何らかのコントロールをしていたはずです。というのは、湖底の堆積層をみると、ずっーと縞状に炭素粒が入っている。30年ぐらい前にそれを見たときは、「ああそうか、ここは乾燥しているので、燃えやすいのか」と思ったのですが、あの層序の規則正しさは、定期的に火をつけてコントロールしたものかもしれない、もう一度見直してみたいと思うようになりました。どうも民族誌を見直してみると、そういうところが所々出てくるのです。

それから熱帯雨林の「破壊」「焼き畑」の問題。テレビの広告にもありましたね。

昨年、チャールズ・ダーウィン研究所に、花博がコスモス賞を渡し、そのあとミッションでエクアドルに行きました。その旅で驚いたのは、低地の森のすごさです。谷なんか、草とかツタが絡まって、何にも見えない。この猛烈な緑の繁殖力に対しては、人間は火をつかうしかないだろうと思いました。ブルドーザーでやればいいでしょうが、石器や鉄鎌で倒すのは大変です。そこで彼らは、焼畑としてシステムチックにそれをやっていたのです。こういうことを考えると、人間というのは自然をただただ守ってきたんじゃなくて、コントロールしてきたんだと思います。

### 人あってこそその自然

日本は森の多い国だと言われます。私は縄文時代をやっているんですが、縄文人は森の恵みにすがって生きてきたと考えられていた。ところが最近の調べでは、この時代には、もう里山ができていたことがわかってきました。例えばあの大きな集落遺跡、三内丸山は、

もとはうっそうたるブナの林だった。ところが人が入ってあの集落をつくると、急にブナが減って、二次林的なナラとかクリに入れ替わる。これは花粉分析の結果、わかってきたことです。縄文人はすでに森のコントロールをやっていたわけです。わたしは、縄文人も火をつかっていたのだと考えています。

すると今、私たちが「自然を守れ」「森を守れ」という問題は、森の極相（クライマックス）は、自然のまままできた極相がベストであると信じ込んでいるからではないでしょうか。しかし、そうではなく日本人は森に手を入れて、里山という使いやすい林をつくってきたのです。自然極相というのは植物の砂漠みたいなもので、使いにくいものです。そこで人間が火を入れたり斧を入れたりしながら里山をつくり、住みやすくしたのだと思うのです。岩槻さんは「里山の自然を守れというすごいジョーク」とおっしゃっているのですが、実はわたしたちにとってはそれがもっとも「理想的な自然」なのではないでしょうか。そうでないと、自然を守るためには人間がいない方がいいということになる。私たちは、やはり人間を中心に自然を見ていくべきだ、人類の歴史をたどってきた一学徒として、そう考えております。

#### 岩槻

どうもありがとうございました。あと1時間ほど話し合いをしていただくのですが、最初に「人と自然」ということについて3人の先生方の話をもう少し詰めていただいて、その後小山先生がおっしゃった「自然を人のために守るとは何か」というようなところに触れていただき、後半で「統合的な物の見方というのはどういうものか」という話題に進めたいと思います。

#### 里山の自然とは

それで最初の「人と自然」ですけれども、自然破壊という言葉を考えてみますと、日本列島でいいますと、決定的な自然破壊が最初に行われたのは、実は新石器時代の始まった時代です。それまで狩猟採集の生活をしていた人たちが鉄器を使うようになって、農耕牧畜に軸足を動かすようになって、うっそうと茂っていた森の一部、谷地・谷沿いなどを中心に低地をざっと20%伐採して農地を造って稲作を始め、そのバックヤードに小山先生が今おっしゃった里山というようなものをつくって、それで新石器時代以後の生活を始めたわけです。これはまさに自然破壊をやってきたということになりますね。だけど、どなたも新石器時代をつくったご先祖様たちが自然破壊の創始者である、とはおっしゃらないですね。なぜそれが自然破壊でなくて、最近の自然に対する営為が自然破壊なのか。

さらに言いますと、里山というのは、日本の場合には、農地がそれほど豊かではない。例えばヨーロッパやアメリカが、一面に農地を展開させて豊かな農産物を獲得したのに比べますと、貧弱な農作物しか得られなかったのです。だから背後の里山を上手に使って、農耕の生活だけではなくて、里山でも採集をやって、それで補うような暮らしを成り立た

せていました。里山というのは、今おっしゃたように、まさに人為・人工が入り込んだ形で、農地と合わせて非常に上手なりサイクルシステムを作ってきたという形なのです。ということは、私どものご先祖様たちは、「人と自然の共生」という言葉がもし成り立つとすれば、人と自然を共生させながら、上手にリサイクルシステムの中で生きてきていたといえます。その結果実は、江戸末期から明治の初めには、里山は非常に貧弱な山になっていたんですね。それが最近、里山の自然を守れと、今おっしゃったようないい方をするようになったのは、里山が豊かな緑を回復してきているということなんです。これは里山が放置されて、例えば関東でいいますと雑木林が無くなってしまっていて、だんだんと多様な緑が回復して自然のような姿になってきているということなんです。そういうことも基礎において考える必要があります。

#### 生物多様性とは

その多様な緑、言い換えれば生物多様性となりますが、1992年に結ばれた生物多様性条約の基本は、生物多様性の持続的利用ということです。これはどういうことかというのを、WHO事務局長のブルントラントさんが、『Our Common Future』というレポートをおまとめでなったときに使われた言い方は、『われわれが今、生物の多様性を利用しているのと同じように、孫子の世代も生物の多様性を利用できるような状態に維持することが、そのサステナブルユースである』という定義です。まさに、先ほど村上先生が指摘された世代間倫理というのが、強く訴えられています。

また、里山というのは先ほども言いましたように、人為・人工の産物ですから、広辞苑で定義されたとおりの自然という言葉を使いますと、「里山の自然を守れ」というのは、国語の答としては落第の答になってしまうんですね。それにもかかわらず我々はすんなりと、そういう言葉を受け入れている側面があるわけです。そういうことをふまえて、3人の先生方にもう一度、養老先生から順番に人と自然との関わりについてコメントをお願いできればと思います。

#### 養老

別な言い方で先ほど申し上げたことを言い直しますと、自然なほうとか何とか言っているけれども、結局は自分の問題だと私は申し上げているわけです。それを多くの方が多分ピントはこないと思います。なぜなら都会に住んで都会的な生活をしていて、自然とは関係ないかかかっていると思うんです。だけど先ほど、それは意識と身体の問題でしようとして申し上げた。

#### 意識中心の社会

私自身が自分の大学で感じたことで申し上げますと、私は北里大学の3階で講義をしています。今年の春学校に行ったら3階までエレベーターができていた。乗ろうと思って上を見たら、身障者専用と書いてあったんです。仕方がないから乗らないで、講義を済まし

で事務に行って、「身障者専用って書いてあるけど、僕乗っていいの。」と聞いたら、「先生、幾つ」「65だよ」「65歳以上は身体障害者と同じ扱いです」と言われて、乗っていいんだというのが分かったんですけど。「どうしてエレベーター、作ったの」と聞いたら「そりゃあ、先生バリアフリーの世の中ですから」と言ったんですよ。だから僕が「ちょっと待ってよ。バリアフリーというんなら入学試験、何とかしてちょうだい」「手足の具合が悪いと学校の費用でエレベーターまで作ってくれるけど、頭の具合が悪いと門前払いを食わせるじゃないか」と言ったんです。それはそのことなんですよ。

つまり、我々の社会そのものが意識中心に組み立てられているということを、私は言っているわけで。非常に極端に聞こえるかもしれませんが、今のような無考えというか、変な偏見というか差別というかですね、それは基本的にいわゆる自然破壊といわれたものとそのままつながっていると、私は思っているんです。

### ロケットよりも大切なもの

もう一つ申し上げたいのは、先ほど、我々が科学技術の最先端と言っているものが何かということをお願いしたのですが、それをよく象徴していたのが、この間の中国の有人ロケットだと思っただけですね。私が、アメリカの月ロケットが飛んだときに書いたことなんですけど、「あんなデッカイものがあんな音を立てて空飛んで、月に落ちりゃ誰だってびっくりする。しかし飛ぶだけならハエでもカでも飛ぶ。悔しかったら、ハエかカを作ってみる」と書いたんです。それは負け惜しみではないんで、私は本当にそう思っているんです。つまりハエとかカを作ろうと思ったらとても作れない。それなのに、ロケットが飛んだと言って、進歩だと言っているのが現代の人なんです。

それと何が関係しているかということ、数年前に、テレビで高校生ぐらいの子が、「なぜ人を殺しちゃいけないんですか」という質問をしたんです。その返事ができなかった、というのが話題になりました。それがどういう文脈でとらえられたかということ、酒鬼薔薇とかいうのがいて、それを若い者が同じような考え方を代表して、人を殺して何が悪いと聞き直ったというふうにとらえたんですけど、それは全く話が違うんだそうです。その場にいた加藤典洋さんという評論家から聞いたんです。「あれはそうじゃないんで、まじめな高校生がまじめな質問をしたんだよ。人間は、ブタを殺して食べたり、ウシを殺して食べたりする。ではその文脈で、どうして人を殺しちゃいけないんですか、というごくまじめな質問」だと。私は自分がいればこういうふうに応えたという答を言いますと、要するに、人が人を殺すというときに皆さん方は、人が人を殺すと素直に考える。私は確かにそういう時代に育ったんです。けんかをする素手でやれと言われて、ある意味では奨励されたんですけど、そこにナイフを持った瞬間に大変な大目玉なんです。

何が言いたいのかということ、ナイフが人を殺すのは極めて簡単です。ところが言いたいのは、そのナイフと人間を比べてみるということなんです。ナイフの単純さと人間とを比

べてください。人間に比べたら、ナイフにせよ、鉄砲の弾にせよ。ロケットというのは鉄砲弾の親玉みたいなものです。それを飛ばして喜んでいるというのは、逆に言えば、その一突きで死んでしまう人間というものの複雑さといったものを、ある意味ではどんどん理解しなくなっているということです。

そのことを、先ほど村上先生が「山川草木悉皆成仏」と言ったけれども、そのすべてのものに仏性があるという。つまり簡単に壊していけませんよという教えは、私はそれを言っているのだと思う。だけれども、ロケットを近代科学の粋だとして、極端な場合涙を流して喜ぶという精神構造が問題である思っている。そうではなくて、本当に我々が創り出すこともできず、根本的にはまだまだ理解のできないシステムというものをどうするか、という話が大切なんです。

私は虫取りが好きですから、夏休みにセミを捕ってうちに帰って、田舎からばあさんが出てきたりすると門前でばったり会って、「お盆にセミなんか捕って、おまえ、極楽いけないよ」と、玄関先でいきなり説教されたんですけど。ちょうどそういう感覚を我々はどんどん失っているのが、いわゆる環境問題として大げさに言われているのではないかと私は考えています。

#### 岩槻

私は最近、いろいろなところでよく知らない人とお会いしたときに、「花を初めて綺麗と思って感動した人は、誰か知っていますか」という質問を投げかけるんです。実は、心を持つようになってきたというのは、科学的好奇心を発達させて、科学を発達させて技術に結びつけたという側面もあるんですけども、同時に美しいものに感動する心というのも、これも人だけのものなんです。だから、ロケットを飛ばして喜ぶのと同じように、野の花を見て喜ぶというのも一番人間らしい行動のはずで、それは必ずしも、自然と相反するものなのかどうかというあたりも問題になると思うのです。

村上先生は先ほど、人がどう生態系に対応するか、ほかの種に対してどう対応するかというような問題提起をされましたが、そういうことを含めて少し。

#### 村上

例えば、トキという種を何とか絶滅から救いたいという努力をしていらっしゃる方々に対しては大変申し訳ないんですけども。もしも自然という観点だけから言えば、トキが絶滅しようがそれは全く自然なことであって、今まで長い自然の歴史の中で絶滅した種というのは、ヤマほどあるわけですし、それを自然がとやかく言っているわけではない。しかし、その一方で、ああいう美しい種が地球から消えてゆくことに対して残念に思う心というのは、人間としてそれはそれでまた尊い話だと思う。そうすると私たちが何とか持続したいと思っている自然の姿とは何か。

#### 残すべき自然とは

私は昭和28年ころに日本の一般の人々を相手にしたアンケートの結果が、いまだに忘れられないんです。「皆さん方の中の、自然のイメージとして最もその心に残っているものは何ですか」というのに対して、秋の、実りの黄金の稲穂がたれた水田に、風がそよいで、黄金の波がスーッと渡っていったような状態というのを、自然のイメージとして最も称揚するという答がいちばん多かったですね。80%近くの人がそれを挙げた。いまだに多分そうだろうと思うんです。だけどこれほど人工的な風景は多分ない。とても自然のままほっておいたらそんなことは起こり得ないわけで、単品種農耕栽培ということから、まさにそれが起こってくるわけです。

私たちが自然といっているのは、極めてそのときそのときの人間の意識の世界が生み出している自然のイメージというものが重要な柱になっているのではないかと思います。それはある種のセンチメンタリズムと言い換えてもいい。そのセンチメントが先ほどから問題になっているように人間の特性であるとすれば、それは大切なものであって一概に否定はできない。人間もまた、自然の中に生まれた自然的存在であることは明らかですから。

その意味で、私は全く養老先生の分類に賛成なんです。つまり、自然と人間という区別はむしろ奇妙な区別であって、人間が自然の中の一部であることは明らかなのです。そのときに人間が自然の中に人間的な価値を認めて、その価値を実現したり、あるいはその価値の崩壊に対して歯止めをかけるというようなことが、人間という自然物の役割であるとすれば、まさしく人間はやはり自然の一員として、そういうこともやってきている。

今欧米の人たちがしきりにいう自然破壊をしたのも人間ならば、それを何らかの価値をそこに与えて、ここまでは保存しようとするのも人間である。もしも人間がそのことを考えないのであれば、先ほどの世代間倫理だってほとんどナンセンスになってしまう。

そこに何らかの意味で、先ほど私が倫理という言葉の一つのキーワードにしたのは、倫理というのは、人間の道、人の道です。人間が自然の中でどう振る舞うかという意志、養老流に言えば意識者としてどう振る舞うかということが、恐らくその倫理というところに効いてくるのではないかと。

その幅というのはものすごく広いと思う。我々はいろいろな意識者としての考え方をもち得るというところに、恐らく問題の本質があるんだろうというふうに考えています。

## 岩槻

私もある自然保護派の方から、文明というものが大体悪いんで、文明を無くしてしまっ、みんな原始林に戻ったほうが本当の豊かさが得られるんじゃないかと言われたことがあります。私はフィールドワークをするために原生的な林に行かせていただくチャンスがしばしばある。植物学の仕事もそういう所へ行きますと能率が上がりますから、楽しいんですけど、せいぜい1週間ですね、そこで暮らせるのは、そういう所がいいからそこへ戻ろうというのは、文明の世界にいるから言えるんであって、そこへ行ったら決して言えな

くなるんじゃないですか、というお答えをしています。

環境省がまだ環境庁と言っていたころに自然保護局が種の保全の仕事の一つでハナシノブ、阿蘇にあるハナシノブの保全にかなりのお金を出しました。ハナシノブは絶滅危惧になっている。なぜ絶滅危惧になっているかというと、あの辺は昔から、牧草を採るために草刈りを継続的にやっていて、それで森林が復元しないで草原になっていたからハナシノブのようなものがあるんです。ところが、草を刈らなくなったものですから、だんだん森林が回復してくる。そうするとハナシノブが生きていけなくなって絶滅の危機に瀕する。だから環境省は絶滅危惧種を守るために、農家の人に補助を出して草刈りを続けてもらうということをやっているわけです。そういうのは自然を守るということに対してどう意味を持つのか。先ほど小山先生がおっしゃった自然を守るということについてもう少しお話を展開していただきたい。

#### 小山

##### 自然を見る視点の違い

私が言いたかったのは、自然を見る視点に違いがあるということです。遠くにいて自然を守れというアメリカやヨーロッパ、それに非常に近づいてきた日本。それに対して、生活者である先住民の見方。

この間、河合雅雄さんと話をしていたら、「わしは猿の目で見ている」と言うんです。猿は自然をどうやってみているかという見方があるんだなと変に納得しました。人間の歴史は180万年とすると、その間、たえず変わっていった自然に対して、どう考え適応してきたかという問題がありますね。

もう一つは、里山の問題。今、松茸が採れないとか、里山を壊したためにいろいろな問題が起こっています。地球研の佐藤洋一郎さんは「せっかく森が自由に生き始めたら、人間はまた干渉するのか。植物はそう思っているはずだ」と。僕は、何か今ある生態系を一面的に捉えて、それがすべてと思っている。生態系はもっと複雑で微妙なものだから、いろいろな視点から考える必要があると思うのです。

#### 岩槻

ハナシノブについていえば、自然保護局は農家に補助を出して一生懸命に草刈りを奨励して自然が回復してくるのを妨げているという、そういうことになっているわけです。トキについていえば、トキという種が絶滅してもそのことによって、生物の多様性が大きい影響を受けるということはないんです。だけど、トキが減ぶということは、トキを中心に行っている生態系にひずみがかかるということそのことが、まさに問題なのです。ハナシノブの場合も同じことで、阿蘇のそういう生態系を保全するのがいいのかどうかという問題提起も含めて、それを保全するためにはどうすることが必要かという試行になっているという部分があるわけです。

それから、今日の主題が統合的な視点というところでもありますので、そちらのほうへも話を移させていただきたいと思います。

### 人間の二面性

先ほど、養老先生は、最終的には細胞のようなシステムをどう見るかということだ、というふうに整理していただいたんですけども、細胞よりもさらに私たちは個体としてのシステムとして生きているわけです。私は生物多様性そのものを生命系という言葉で表現させていただいていますけれども、最終的にはそういうシステムが取り上げられないといけないと思うんです。

自然とのかかわりでさっき村上先生が、人間も自然の一部なんだということを強調されました。先ほど心と体というものを、養老先生は一つの対立概念として、人と自然とを合わせてご説明になったんですけども、もっと積極的に人間というのは自然の一部、動物ホモサピエンスとしてのヒトの部分と、それから意識を持って心を持って生きている人間的な側面と、二面性があるんだという言い方をしたほうが、もう少し分かりやすいように思うんです。そういう言い方をしますと、養老先生のさっきおっしゃったことと何か齟齬（そご）をきたすことになりそうですでしょうか。

### 養老

必ずしもそうじゃないと思うんですが、最初に申し上げたように、とにかくこれは受け取り方の問題ですね。人間と自然といったときに、人間と自然の間に線があるように考えてしまうといけないと思っただけなんです。

### 岩槻

さらに、先ほどの遺伝情報、情報ということをもう少し整理してみます。

日本学術会議で『日本の計画』という大きいレポートを作ったときに、遺伝情報とかそういうものに限定しないで、社会に循環する情報というようなことまで含めて、情報循環という言葉でどう整理できるかということを試みたことがあったんです。そういう情報の循環からいいますと、心の問題も、先ほど言いました二面性という言い方からしますと、人の動物的な側面というのが遺伝情報を親から子へと伝達し、その遺伝情報が発現することによって人の動物的機能は示すことはできるわけです。心というのは、生体外に情報を蓄積するようになってきて、その情報量がほかの動物とは決定的に違うくらい増量してきて、さらにそれが言語や文字というような形で蓄積されるようになってきて、だんだん心というのが心らしくなってきた。そういう心らしさが、科学的好奇心だとか花や富士に感動する心に結びついてきたんだというふうな整理の仕方をしますと、これは、脳の立場からいいますと暴論になりますでしょうか。

### 養老

特に、これもやはり表現の問題かなと今思っております。

## 岩槻

われわれ自然科学をやっていると、分析・解析をやって論文を書くということをやっているわけですが、そういうことをやりながら、統合的な視点を持たないと21世紀は救えないと考えている。個々に分析・解析するのではなくて、例えば、細胞システムとして、個体システムとして見るというのは、ペーパーにつながるとすれば、どういう形でしょうか。例えば、ネイチャーやサイエンスに載せるペーパーにつながるとすれば、どういうことになるのか。統合的な研究というのは一体何なのかということについて。

## 養老

システムに関する仕事は極めて簡単で、例えば、システム自体を構築するという、一番素朴なやり方はロボットです。ロボットをやっている研究者に聞きけばすぐに分かるので、「おまえ、論文書ける」「書けません。論文書いている暇があったらロボット改良しています」と。これはアーティストがみんなそうで、絵描きさんはどうやったらいい絵が描けるかという本は書けません。そんなことを書くぐらいなら自分でいい絵を描いています。

私は環境問題とはそういうものだと思うんですね、根本的には。皆さん方が、どういうふうに暮らすかということが環境問題なんであって、それを本にして出すことでは、本来はないと思っています。

ですから、私も一人でやっていますけれども、それは、我々の、まさにさっきから申し上げている、我々の考え方だけだと思っているんです。

だから逆に言うと、あんまり高いレベルの問題ではないような気がするんですね、そのシステムの問題というのは。だけでも、少なくとも今の大学の中でいわゆる研究と称するものをやっていたらそういうことはできないよ、ということを誰でも知っているんですね。

私は京大の霊長研に講義に行ったことがあるんですけど。夜になったら、若い研究者が『世界のカブトムシ』なんて本をいっぱい持ってくる。そういうのが好きなやつが霊長研にたくさんいるんですよ。「何でおまえらは霊長研にいるんだ」と言ったら、「霊長類を研究する」といって大体熱帯に行ける。熱帯に行けば虫が捕れる」と、こういう三段論法なってるんです。だから、それなら素直に、そんなことができるように社会を変えたらいいだろうというのが、私の意見なんです。

## 社会の価値観を変える

先ほど村上先生が言ったことは、極めて私は象徴的だなと思ったんだけど、ブタについての話。これは、ブタを体の中に入れても平気かという質問をするとだいぶ違ってくるんじゃないかと思うんですが、日本人はそういうところは意外と差別しないんだけど、今度は役に立つか立たないかということ徹底的に差別してくるんです。それで、虫なんかやっていると、そんな役に立たないことをやってという話になる。そこら辺の問題のほうで、私は生物多様性だったら、ごく具体的なむしる問題だろうと思っています。

そういうことを一般の方があまり価値を置かないというか、そういうことに価値を置く人は、変わり者ということなんです、この社会では。

だからそういうふうに社会の価値観を変えていただかないと。医者でしたら、論文書くより患者の面倒を見るのがまともな医者だろう、という教育ができるかということです。だけど、それがなぜできないかと言ったら、学生を採るときに入学試験で採ってるんですもん。入学試験ってなんだと言ったら点数で、まさに学生に関する情報なんです。だから大学でやっていることは、入試で学生を採っているのではなく情報処理をやっている。この点より上なら採るけど、東京大学は点切りですよ。そういう極めて合理的なシステムを我々作ってしまっているんで、そのシステムはおかしいと言うと、あいつは変だと言われるんです。それはですから皆さん方の常識の問題だと、私は思っている。

#### 村上

養老先生は患者さんに対して、情報でなく理解しているのは看護婦さんだと言われた。だとすると、さっきから岩槻先生がしきりにおっしゃろうとしている、例えば個体については、医療の立場から言えば、看護婦さんという存在がある。では個体よりもっと大きくなったときに、生命系というシステムに対して看護婦さんがいるのかどうか、というのを少し伺いたいんですね。それは例えば今のだと、虫の愛好者だったり、芸術家だったり、あるいは、とにかく少なくとも、科学者ではないとおっしゃりたいようなところがある。

#### 養老

最近書いた本でまだ出てないんですけど、『この世で一番大事なこと』という副題が付いているんで、それは環境問題。つまり、環境問題って政治の問題です。政治というのは皆さん方は、日々の自分の利害にかかわりのあることを決めること、と定義されていると思うんですけど、私はそういうふうに定義していないんです。まさに村上先生がおっしゃったような、将来の世代を含めて、何が一番大事かを決めてやっていくものが政治だというふうに思っています。

#### 岩槻

先ほどおっしゃったように、環境というようなシステムを考えようと思しますと、すぐにはオリジナルなペーパーにはならない。それにもかかわらず、環境に関して科学者が貢献しようと思えば、今の日本では競争的資金を獲得しないとやれないという大きい矛盾があるわけですね。そういう意味で、村上先生にお伺いしたかったです。科学は本当に統合的な視点で、今我々が20世紀に考えてきたような科学の上に、貢献が目に見えてくるような形で評価できるような姿というのがあり得るのかということなんですけども、いかがでしょうか。

#### 村上

その点ではかなり悲観的なんです。あるときに講演会をやりまして、そのあと懇親会が

ありまして、そしたらある大学の、生物学の先生が私のところへいらっしゃいまして、「自分は鱗翅学会に入っている。だけれどもそのことは、大学の中では言えない」とおっしゃるんです。つまり「プロモーションの妨げになり得るから」ということなんですね。鱗翅学会というのは、いわば虫の大好きな人たちも会員であり得るような、そういうグループなんです。

現在の自然科学の基準から言えば、それは文字どおりアマチュアであって、プロの、論文を書かないような人間だということになっている。その状況が続く限り、やはりその統合的な科学的な仕事というのは、かけ声はたくさん掛かっているんだけど評価されることは非常に難しいことだというふうに思っています。

#### 岩槻

小山先生にお伺いしたいのですが、梅棹先生が人類学というのは、自然科学の中で“つらぬく科学”に対して、“つらねる科学”であると言っていますね。“つらねる”というのは、まさに統合するということだと思っんですが、その辺はいかがでしょうか。

#### 小山

あんな偉い人のこと急に言い出されたら、アタマが混乱してしまう（笑）。梅棹さんの意見で印象に残っているのは、「口ざわりはいいが栄養のない情報をこんやく情報」と言ったことです。情報そのものに価値があるわけではない。とにかくできるだけたくさん集めて、それを連ねるのだと言っていると思うのですが、僕はむしろ梅棹さんは、あの鋭い洞察力で貫いているのだと思います。

ところで、さっきの村上さんの意見について考えたのですが、日本人はずっと利益の追求ばかりやっていたのが、最近になって、世界のためだとか次世代のためだとかいうようになった。それを進歩と見るのか、突然変異と見るのか。国際的に見ると、やはり一種の進歩でしょうね。理想と現実がぶつかったとき、どちらをとるか。

#### 岩槻

村上先生、いかがですか。

#### 村上

##### 人間中心主義は残る

基本的には人間中心主義というのは、変えられないと思うんです。人間が何かをしようとしているときに、それぞれの種が全部それ自身平等に価値を持っているというのであれば、それこそ病原体から何から何まで全部同じ価値・尺度の上で論じなければならなくなってくる。私たちは、そのことは多分やらないだろうと。その意味では、どこまでいっても最終的に人間中心主義的な視点というのは、人間の中から離れないだろう。

お釈迦（しゃか）様の有名な話があって、ワシがウサギを追いかけてやってきた。ウサギがお釈迦（しゃか）様のお弟子さんのところへ飛び込んで「助けてくれ」と言った。お

弟子さんがワシに「食わないでくれ」と言ったら、ワシが「私の命はどうするんだ」と言った。そこで「私の、ウサギと同じだけの重さの肉をやるから勘弁してやってくれないか」と言って、天秤の一方にウサギを一方に片足を載せたら全然動かない。両足載せても動かない。最後に、その人がはかりに乗ったらようやく動いてバランスが取れた。つまり、ウサギ一匹と人間一人とは全く等価値だという話になるわけです。本当にこれを実践しようと思ったら、ウサギならいいんですけど、細菌まで、ミミズまで、そこに生えている草まで命ということで同じだと言ってしまったら、これは、恐らく人間のものを考えるときの、その考え方の筋道が立ちにくいと思うんですね。

#### 岩槻

その人間中心主義を、どのように限定、あるいは、拡大するかというのが難しいポイントではないかと思うんですが。

#### 養老

今、村上先生は人間という言葉でまとめられましたが、私はそれは人間が作るシステムと考えるべきだと思います。そうすると、個々の人間とウサギの問題ではないんで、人間が作っているシステム、それは社会なら社会を含めたものと、自然界とのやりとりになります。

人間中心については、私も全く同じ意見で、人間にかかわりのない自然というのが存在するとすれば、それは意味がない。つまりそれは議論をする必要はないことなんです。

#### 岩槻

もっと直截(ちよくさい)に言いますと、我々は生物の死体だけを食べて暮らしていくわけにはいかないので、それは当然殺すということが伴うわけですね。そのことに関して、ごく最近ある委員会で、非常に深刻なことを伺ったんです。外来種に関する話題の一つですが、沖縄のマンガース、あれは導入したものなんですが、それが増えすぎて家畜にも影響及ぼしますし、野生のヤンバルクイナなどを食べているというので、捕獲をして、大量に殺りくをしているわけですね。

そういうニュースが伝わって、たくさんの人から国が大量殺りくをやるとは何事かという抗議が来るんだそうです。学校の先生からも生徒に生命の畏敬について教えられなくなってしまふ、というコメントが来るというんですね。

ですから、先ほど申し上げたように、どこまで人というのを拡大して考えたらいいのか、どこから先はいけないのかというような境界作りが問題になる。

#### 小山

今考えていたんだけど、「トキを守る会」とか「マンガースを守る会」は、ある程度盛り上がるでしょうけど、「SARSを守る会」というのをしたらすごいでしょね。みんなにどう言われるのか。やはり私たちは価値判断を持ち込んでいるんですよ。

### 養老

「SARSを守る会」と、たまたまおっしゃったから。私はSARSが流行らないかなと思って。SARSの死亡率は50代50%、60代60%、70代70%で、日本の人口の比率を適正化するにはあれがはやるのが一番いい。それは冗談ですけど、もし守る会というものができるとすれば、そういう主張でしょうね、恐らく。

### 岩槻

今のは非常にサジェスティブなお話だったと思います。自然の問題にしても、科学の統合化という問題にしても、きょうのお話で結論が出てくるとは初めから期待はしていなかったんですけども、きょうおいでいただいた方はいろいろと考える素地を得られたのではないかと思います。私自身もそうですけど、これまで自分なりに考えていたことと違う視点から、自然に対する見方、あるいは科学を統合的に見る見方というようなことについて、考えるきっかけを今日得られたと感じています。

今日のこのフォーラムのことは、花博記念協会のホームページで出させていただきます。今日はフロアから発言をいただくことができなかつたんですが、ホームページにコメントをいただくような機会を作っていただけなので、今日のお話をきっかけに何かこういうことを考えていただいて、また議論していただければ有り難いと思います。